

説話と教理の関係に関する一考察

— 奇蹟譚をめぐって —

関 稔

説話を取り上げる以上は、まず説話というものの定義や範囲を明確にしておかなければならないのであろうが、今はとりあえず便宜的に伝説や神話めいた〈はなし、ものがたり〉という大雑把な括りをしておく。周知のように現存の仏教の経典等にも伝説や神話めいた〈はなし〉は数多く含まれており、経典をはじめとする仏教聖典といわれるものの全体が〈はなし〉の集積であると言うこともできる。もちろんそれらの経典等は宗教の書でもあるから、いずれは教理というものに集約されていくさまざまな考えや教えや主張を述べることに作成の主意があったはずである。しかし場合によっては、考えや教えや主張といったものをむき出しのかたちで押しつけよりは、受け手の資質や嗜好に配慮して物語性や虚構性に包み込んで伝えるほうがより効果的であった、ということが神話や伝説が多用された所以の一つであろう。

以下に、主として仏教の開祖であるゴータマ・ブッダにまつわる奇蹟譚の若干を取り上げるが、小論はそれらを伝える側である昔のインドの経典等の作者や伝承者たちにどのような語り姿勢があったのかを垣間見ようとするものである。

結論めいたことを先取りすれば、次のようなことになる。

内容の核が同じである奇蹟譚であってもそれを伝えようとする側には、

言い換えれば伝承経路の間には、大別すれば二様の姿勢を見いだすことができるということである。一つは、ブッダは確かに奇蹟を現出する人であったのだと奇蹟の非合理性といった点には疑いをもたずに率直に語ろうとする姿勢である。この姿勢のとりかたは、ブッダを素直に超人視したいという心情発露の結果である。もう一つは、奇蹟のみを強調することはできれば避けたいという姿勢であり、この場合には奇蹟の背景や奇蹟を語る効果などが詮索の対象となる。

以下において最初にガンジス渡河奇蹟譚のパーリ伝承を紹介するが、伝承によってはブッダに「むかし、わたしはブッダとなる以前に、ここに来たことがある。筏や船に乗ったことは数えきれない。いまは解脱しているから、もはや乗る必要がない⁽¹⁾」、あるいは「わたしは人をして世間を渡らせる者であって、人から渡らされる立場にはない⁽²⁾」と自念させたりしているが、そこでは二つ目の姿勢が看取されよう。ブッダが超人であることを期待する聞き手の意向に沿って奇蹟を語りはするが、ブッダが渡ったのは実は迷妄の世間なのだという具合に、現今からすれば合理的とも言える説明の態度がそこにはある。このケースでは、実際の語りの場ではたとえば世間とは何か、渡るということはどういうことかといった問題についての仏教的理解が付されたことであろう。

とくに出家以降の生活が大河ガンジス周辺での長期にわたる遊行の連続であったゴータマ・ブッダにあっては、河を渡らなければならないという事態は絶えず発生したことであろう。後世にどのように伝えられていくにせよ、渡河そのことは珍しくもない頻発する日常的な行動であったに違いない。河岸に達すれば普通の旅行者と同じく、橋があればそれを利用し、無ければ船や筏の助けをかりて渡るというのが渡河の実際であったであろう。ところが、ゴータマ・ブッダの場合には超常的な渡りかたをしたのだと考える人たちも出てきた。

説話と教理の関係に関する一考察（関）

最晩年のいわゆる〈最後の旅〉において、ある村落を経過したゴータマ・ブッダの一行はガンジス河畔に到着する。次は、『マハーパリニッバーナ・スッタ（大般涅槃經）』の伝える渡河の場面である。⁽³⁾

さて、尊師はガンジス河に近づいた。そのとき、ガンジス河は水があふれて岸辺すれすれに流れ、鳥でさえ水が飲めるほどであった。ある人たちは船を探し、ある人たちは大きな筏を探し、ある人たちは小さな筏を結んで[こしらえ]、対岸へ行こうとしていた。尊師は、あたかも力ある人が屈した腕を伸ばしでもするかのように、あるいは伸ばした腕を屈しでもするかのように、[またたく間に]ガンジス河のこちらの岸から姿を消して、比丘の集まりとともにあちらの岸にたたずんだ。

尊師は、ある人たちは船を探し、ある人たちは大きな筏を探し、ある人たちは小さな筏を結んで[こしらえて]、往来しようとしているのを見た。そこで、尊師はことからのいきさつを知り、このような感興のことばを発した。

沼沢を避け、橋をかけて、河や湖を渡る人たちがいる。

[材料を]結んで筏をこしらえる人たちがいる。

聡明な人たちは、渡ってしまっている。

以上によれば、ゴータマ・ブッダは一般の人々のように船や筏に乗るまでもなく、弟子たちと一緒に瞬時のうちに対岸に渡っていた、というのである。いわば瞬間場所移動とでも言うべき超常現象が現出したというわけであるが、後半に付された詩文にはそこまでの言及はない。奇蹟による渡河を語ることが当初からの本意ではなかったことを詩文が示唆しているように思われる。ちなみに、この詩文趣意の古今の解釈については中村元博士の紹介があるので参照されたい。⁽⁴⁾

ブッダは奇蹟を現出しうる超人であって欲しいという気分は時とともに増幅していったようである。この同じ場面においてブッダは「『水上を歩

いて行こうか』とも考えた」とする類の伝承は、⁽⁵⁾ブッダの超人視傾向がより進んだ段階の産物であろう。

次に引用する『根本説一切有部毘奈耶藥事』の記事は、神話的潤色が格段に豊富となった例であり、超人ブッダを伝えたいという気分が横溢する。

そのとき、マガダ国のアジャータシャトル王とヴァイシャーリー市のリッチャヴィ族の人々はそれぞれに船橋を造った。そこで、龍たちは「われらの今生の身は悪趣にあるが、福業を為すことにしよう。それぞれが頭をもたげ、ガンジス河の中に連なって橋となり、世尊たちがその上を踏んで通過できるようにしよう」と考えた。このように考えると、龍たちはそれぞれに頭をもたげ、連なって橋となった。そのとき、世尊は修行僧たちに「お前たちは各自の心にしたがって、三つの橋のいずれかを渡るようにしなさい。私はアーナンダと一緒に龍の橋を通してガンジス河を渡ることにしよう」と告げた。ある弟子たちはアジャータシャトル王の橋を選び、他の弟子たちはリッチャヴィ族の人々の橋を選んだ。ただ世尊とアーナンダのみが龍橋を渡った。⁽⁶⁾

ちなみにこの龍橋のモチーフはクチャ・キジル石窟の壁画にあらわれ、⁽⁷⁾伝承経由地では広く愛好されたはなしであったことが確かめられる。

ブッダが初めての説法のために鹿野苑へ赴くときのこととして伝えられる空中飛行による渡河奇蹟譚がある。次は、『ラリタ・ヴィスタラ』の伝承である。

さらに、比丘たちよ、ガンガーの大河は水あふれて岸と水平になって流れていた。そのとき、比丘たちよ、如来 [=ブッダ] は対岸に渡るために船頭に近づいた。そ [の船頭] は『ガウタマよ、渡し代を出しなさい』と言った。『友よ、私には渡し代がない』と言って、如来は空中をたどって [こちらの] 岸からあちらの岸へ行ってしまった。そこで、その船頭はそのありさまを見て、『このような尊い人である

のに、私は渡してやらなかった』と言って、ひどく後悔した。『ああ、悲しいことだ』と言って、悶絶して大地に倒れた。その後、船頭は『王さま、沙門ガウタマは渡し代を請求されたとき、渡し代がないと言って空中をたどってこちらの岸からあちらの岸へ行ってしまいました』と、このことをビンビサーラ王に報告した。それを聞いたビンビサーラ王はただちにすべての遍歴行者の渡し代を免除することにした。⁽⁸⁾

この伝承では渡河の奇蹟を理屈を付さずにそのままに伝えたいという気分が濃厚であるように思われるが、終わりに宗教家への免除特権の話を加していることから、事実は無賃乗船できたのであろうという学者の絵解きがある。⁽⁹⁾

奇蹟的行動はブッダとの関連において一般人にも起こりうると考えられた。次は、『ジャータカ』第一九〇話の現在物語に出てくる敬虔な在家信者のほなしである。

聞くところによると、その信心深く敬虔な聖弟子〔である在家信者〕は、ある日ジェータの森へ行こうとして、夕刻にアチラーヴァティー〔川〕の岸へ行った。船頭が舟を岸に引き上げて〔ブッダの〕教えを聞くために出かけてしまっており、渡し場には舟が見当らなかった。そこで、ブッダにたいする喜びのころをいだいて、川へ入っていった。足が水中に沈むことがなかった。かれが地表を進むかのように〔川の〕中央に達したとき、波〔が立つの〕を見た。そのとき、かれのブッダにたいする喜びのころが薄らぐと、足が沈みはじめた。かれはブッダにたいする喜びのころを堅固にして水上を進み、ジェータの森に入り、師に敬礼して一隅に坐った。⁽¹⁰⁾

この水上歩行の奇蹟は他宗教の伝承との類似が指摘され、⁽¹¹⁾その点で興味深い。蛇足となるが、『新約聖書』の伝えは以下のごとくである。

イエスは夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。

説話と教理の関係に関する一考察（関）

弟子たちは、イエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた。しかし、イエスはすぐに彼らに声をかけて、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と言われた。するとペテロが答えて言った、「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」。イエスは、「おいでなさい」と言われたので、ペテロは船からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助けください」と言った。イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」⁽¹²⁾。

ブッダにたいする〈喜びのこころ〉とイエスにたいする〈信仰〉が両奇蹟譚に共通するメッセージである。

以上いくつかの奇蹟譚を紹介して前置きとしたが、終わりにカッサパ三兄弟帰信を伝えるパーリ『ヴィナヤ』の伝承を取り上げて、パーリ伝承者の奇蹟の扱いかたを一瞥する。

ブッダは初めての説法などを行ったヴァーラーナシー近辺での滞在のうちに再びマガダへきびすを返すが、その途上のウルヴェーラーの地方でウルヴェーラ・カッサパ、ナディー・カッサパ、ガヤー・カッサパという三兄弟を初めとする千人の結髪行者を帰依させたという伝えがある。その実数のほどはともかく多数の一時の帰依は最初期の仏教にとって教勢拡大の点で画期的なできごととされるが、そのときにブッダはさまざまな神変を現わして三兄弟を屈服させたということである。

パーリ『ヴィナヤ』の記述によれば⁽¹³⁾、順次ブッダは神力を発揮して火炎を放つ凶悪な龍王を自らの火力で穏やかにさせ、深夜の密林に光彩放つ四天王や帝釈天や梵天たちを登場させ、ウルヴェーラ・カッサパのこのころの内をひそかに読み取り、帝釈天に洗濯用の池や乾燥用の石を化作させ、後

説話と教理の関係に関する一考察（関）

発しながら食事の場所にウルヴェーラ・カッサパより先着し、ウルヴェーラ・カッサパたちに割れなかった薪をたちまちに割らせ、燃えなかった火をたちまちに燃やさせ、消えなかった火をたちまちに消させ、水垢離の行を行う者たちに暖をとらせるための暖炉を化作していった。

そして、最後に紹介される奇蹟現出の場面は次のような次第である。参考までにサンスクリット伝承と漢訳伝承の一つを添える。

そのとき、大きな黒雲が雨を降らせた。大洪水が起きた。世尊がとどまっていた場所が水で覆われた。そこで、世尊はこのように思った。『ぐるりの水を退去させて、[乾いた]塵に覆われた大地を経行しよう』と。世尊はぐるりの水を退去させ、塵に覆われた大地を経行した。さて、結髪行者であるウルヴェーラ・カッサパは『この大沙門が水に流されるようなことがあってはならない』と思い、大勢の結髪行者たちとともに舟で世尊のとどまっているところへ行った。結髪行者ウルヴェーラ・カッサパは、世尊がぐるりの水を退去させて塵に覆われた大地を経行しているのを見た。見て、世尊にこのように言った。『ここにいるのは、あなたですか。大沙門よ』と。『そうだ、私だ。カッサパよ』と言って、世尊は空中に舞い上がり、舟のなかに立った。結髪行者ウルヴェーラ・カッサパは、このように思った。『大沙門は大神力をもつ者であり、大威力をもつ者である。実に、[大洪]水も[かれを]流すことがないからである。だが、わたしと同等の聖者ではない』と。⁽¹⁴⁾

（さて、世尊は結髪行者ウルビルヴァー・カーシュヤパの住処である森林に滞在していた。そのとき、ナイランジャンナー河では大水流が出現していた。世尊は、身の丈もある水のかたまりに囲まれて、土塵に覆われた露地を経行していた。そこで、結髪行者ウルビルヴァー・カーシュヤパはこのように思った。『まことに大沙門はすぐれた方だ。水流に流されるようなことがあってはならない』と。『大沙門をさが

そう』と丸木船に乗って世尊をさがした。結髪行者ウルビルヴァー・カーシュヤパは、世尊が身の丈もある水のかたまりに囲まれて土塵に覆われた露地を經行しているのを見た。見て、それから、このように言った。『生きていますか、大沙門よ』と。『わたしは生きている、カーシュヤパよ』[と世尊]。『乗りなさい、大沙門よ。丸木船に乗れますか、大沙門よ』[とカーシュヤパ]。『乗ります、カーシュヤパよ』[と世尊]。そこで世尊はこのように思った。『こころの定まるままに神通力を発して、水さながらに、丸木船に乗ることにしよう』と。世尊はこころの定まるままに神通力を発し、水さながらに丸木船に乗った。結髪行者ウルビルヴァー・カーシュヤパはこのように思った。『大沙門が[このように]大神通力をもち大威力をもつとは、驚くべきことだ。しかし、わたしもまた聖者である』と。⁽¹⁵⁾

（爾時、四面有大黒雲起、天大雨墮如象尿、潦水齊腰。時、迦葉念言『此大沙門、極為端正、人中第一。或能為水所漂』。即將徒衆、乘一樹船、往求世尊。世尊爾時、在外露地、經行。地燥如舊、猶如屋內。念言『此大沙門、神足自在、得阿羅漢。雖爾、故不如我得阿羅漢。』⁽¹⁶⁾

ブッダによるさまざまな神変＝奇蹟の現出があり、それらを目の当たりにした直後にそれぞれの弟子とともにブッダに帰依するにいたったというのがカッサパ三兄弟帰信物語の全体である。この話の流れに沿うかぎり、聞き手は奇蹟こそが帰信の要点であったと受け取りやすい。奇蹟現出が偉人の要件であると考えられた環境にあっては、このような語りの姿勢が一方の主流をなしたのであろう。

ウルヴェーラ・カッサパがブッダへの帰信を決意するに当たり、自らの弟子たちに各自の帰信選択の如何を尋ねたとき、弟子たちが『私たちはブッダの多くの奇異を見ました。あなたがその教えを受けようとされるのであれば、私たちもまた随従して帰依したいと思います』とこたえたとする類

⁽¹⁷⁾話などは、直接の契機が奇蹟であったことを明白に表明した例である。

次は成道直後のブッダの行動を要約的に伝える『ジャータカ』の一部の引用であり、奇蹟と帰依を明快に直結させて記述した例である。

こうして世に六十一人の聖者が誕生した。師は雨期の定住を終え、その終了の行事を行い、『比丘たちよ、遊行に行きなさい』と言って、六十人の比丘たちを諸方へ送り、自身はウルヴェーラーへ赴いた。途中のカPPERシャの密林で三十人のめでたい身分の仲間である若者たちを導いた。かれらのうち、最下の者は聖者の最初の境地に達し、最上の者は聖者の第三の境地に達した。かれらすべてをもく来なさい、比丘たちよ」というかたちで出家させ、諸方へ送り、自身はウルヴェーラーへ赴いた。三千五百の奇蹟を現して、千人の結髪行者をしたがえたウルヴェーラ・カッサパを初めとする結髪行者である三兄弟を導き、やはりもく来なさい、比丘たちよ」というかたちで出家させ、ガヤーシーサ山にとどまらせ、く燃える火の教えを示して聖者の最高の境地に就かせた……⁽¹⁸⁾。

先述のように奇蹟面を強調しようとする姿勢は根強い伝統となったようであるが、その姿勢を受けた解説の仕方は現今もあり、「哲学的思弁を得意とせず、しかも老齡固陋の彼 [=ウルヴェーラ・カッサパ] を心服させるには理屈をもってしてはだめであって、神通奇蹟を用いるよりほかに方法がなかったのである」⁽¹⁹⁾、「このようにして、ブッダがウルヴェーラーでカッサパに示した神変によって、いっきょに千人の人々が仏教に帰依することになった」⁽²⁰⁾、「かれらは拝火教徒として、当時の有力な修行者であった。仏陀はさまざまの神変を現して、かれらを屈服せしめたという」⁽²¹⁾などは、そうした例である。

ところで、このカッサパ帰信物語における奇蹟譚の効用を次のように読みとるならば、別様の解説ができることになる。

説話と教理の関係に関する一考察（関）

ブッダはウルヴェーラ・カッサパの面前でさまざまな奇蹟を現わして圧倒した。しかしながら、奇蹟が終息するごとにウルヴェーラ・カッサパは『大沙門（＝ブッダ）は大神力をもつ者であり、大威力をもつ者である』と驚嘆しながらも、『しかし、わたしと同等の聖者ではない』と考えたと例外なく伝えて、即座には心服しなかったことを暗示している。この語りは、ウルヴェーラ・カッサパ帰信の直接の契機が奇蹟ではなかったと伝えられているようである。この点は大いに注意しておくべきであろう。

パーリ『ヴィナヤ』の上記引用の続きは次のようになっている。

そのとき、世尊はこのように思った。『この愚か者は、なお久しく〈大沙門は大神力をもつ者であり、大威力をもつ者である。しかし、わたしと同等の聖者でない〉と考えるだろう。この結髪行者を畏怖させることにしよう (saṃvejjeyyam)』と。そこで、世尊は結髪行者ウルヴェーラ・カッサパにこのように言った。『カッサパよ、おまえは聖者ではない。聖者にいたる道にも入っていない。おまえが聖者になれるような、あるいは聖者にいたる道に入れるような、そのような方途はまだおまえにはないのだ』と。そのとき、結髪行者ウルヴェーラ・カッサパは頭を世尊の足下につけて伏し、世尊にこのように言った。『師よ、わたしは世尊のもとで出家し、具足戒を受けたいのですが』と。

『カッサパよ、おまえは五百人の結髪行者の先導者、指導者、最上者、先行者、首長である。かれら〔五百人の弟子たち〕も、考えるところにしたがって行動できるように、認められなければならない』と〔世尊は言った〕。そこで、結髪行者ウルヴェーラ・カッサパはその〔五百人の弟子である〕結髪行者たちのところへ近づいた。近づいて、その結髪行者たちにこのように言った。『わたしは、大沙門のもとで清らかな修行をするつもりである。おまえたちも考えるところにしたがって行動しなさい』と。『はやくから、わたしたちは大沙門を信じ

説話と教理の関係に関する一考察（関）

ています。あなたが大沙門のもとで清らかな修行をするのであれば、われわれもみな大沙門のもとで修行をします』と〔五百人が応えた〕。

その結髪行者たちは、毛髪、結髪、携行品、事火具などを水に流して、世尊のいるところへ近づいた。近づいて、頭を世尊の足下につけて伏し、世尊にこのように言った。『師よ、わたしたちは世尊のもとで出家し、具足戒を受けたいのですが』と。『来なさい、比丘たちよ』『教えはよく説かれた。正しく苦しみを終息させるために、清らかな修行をなさい』と〔世尊は言った〕。これこそが、その尊者たちの具足戒であった。⁽²²⁾

ウルヴェーラ・カッサパは奇蹟を目の当たりにしても依然として『[いまだブッダは] わたしと同等の聖者ではない』と判断をしたが、そのときブッダに心中の思いを読まれた。『おまえこそ聖者の入口にも入っていないではないか』と畏怖されてブッダのもとでの出家を決意した、というのがことらの次第であろう。読心の術もブッダの超人性を示す資質であろうが、いまの文脈では真実の聖者（阿羅漢）とはいかなるものかといった設問がむしろ重要である。

このウルヴェーラ・カッサパたちの仏教帰信の話は、その後にかれらがブッダに率いられてガヤーシーサ（象頭山）に赴き、そこで『比丘たちよ、すべては燃えている……貪りの火によって、いかりの火によって、愚かしさの火によって燃えている』で始まる〈燃える火の教え〉を受け、もろもろの煩惱から離脱するにいたったということで決着する。奇蹟譚の羅列は全体の結構からすればいささか長たらしい前置きとなっはいるが、〈聖者の問題〉〈燃える火の教え〉を導き出す役割をもになっているのである。

[注]

- (1) 「往昔未作仏時，身所更來，乘此桴舡，不可復數。今以解脫，不復乘此」
『般泥洹經』卷上(『大正』一卷，一七八頁上)
- (2) 「我是度人師，使人得度世道，不復從人受度」『仏般泥洹經』卷上(『大正』一卷，一六三頁上)
- (3) *DN. (PTS), ii, p.89. Cf. Vin., i, p.230*; 『般泥洹經』卷上『大正』一卷，一七八頁上 - 中)，『仏般泥洹經』卷上(『大正』一卷，一六三頁上)，『長阿含經』「遊行經」(『大正』一卷，一二頁下 - 一三頁上) その他。
- (4) 中村元『ブツダ最後の旅』二一四 - 二一五頁。
- (5) 「世尊見已，作如是念『我今為当安歩中流水上而去』」『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷三六(『大正』二四卷，三八五頁上)
- (6) 「爾時，摩羯陀国未生怨王，及広嚴城栗姑毘等，各造舡橋。于時，諸龍便作是念『我今身墮惡趣，應修福業。各舉其頭，於菴伽河中，相統為橋，令世尊等蹈上而過』。作是念已。彼諸龍等，各各舉頭，相統為橋。爾時，世尊告諸苾芻曰『此三橋上，欲得過者，隨汝等心。我当与阿難陀，蹈彼龍橋，渡菴伽水』。其諸弟子，或取未生怨橋，或取栗姑毘橋。唯有世尊及具寿阿難陀，於龍橋上而渡」(『大正』二四卷，二三頁下)。Cf. Cowell & Neil, *The Divy-âvadâna*, pp. 55-56.
- (7) 東京国立博物館編集『シルクロード大美術展』一四三頁参照。
- (8) Lefman, *LALITA VISTARA*, i, S.407. Cf. Senart, *LEMAHÂVASTU*, iii, p.328; 『方広大莊嚴經』卷十一(『大正』三卷，六〇六頁上 - 中)，『仏本行集經』卷三三(『大正』三卷，八〇八頁下 - 八〇九頁上)
- (9) 中村元『ゴータマ・ブツダ I』(中村元選集 [決定版] 第十一卷) 四七五 - 四七七頁。
- (10) *J. (PTS), ii, p.111.*
- (11) 梶山雄一『輪廻の思想』一三七 - 一三九頁参照。
- (12) 『新約聖書』「マタイ」14.25-31(「マルコ」6.47-51, 「ヨハネ」6.16-21参照)
- (13) *Vin. (PTS), i, pp. 24-32.*
- (14) *ibid.*, p.32.
- (15) Gnoli, *The Gilgit Manuscript of the SBhV.*, i, pp. 227-228.
- (16) 『四分律』卷三三(『大正』二二卷，七九六頁上)。なお、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』卷七(『同』二四卷，一三三頁中)，『太子瑞応本起經』卷下(『同』三卷，四八二頁中 - 下)，『普曜經』卷八(『同』三卷，五三一頁下)，『仏本行集經』卷四二(『同』三卷，八四八頁下 - 八四九頁上)，『五分律』卷十六(『同』卷二二，一〇九頁上)，『中本起經』卷上(『同』四卷，一五一

説話と教理の関係に関する一考察 (関)

頁中),『増一阿含経』卷十五(『同』二卷,六二一頁下),『過去現在因果経』卷四(『同』三卷,六四九頁上-中)等に対応部分。

- (17) 「……我等亦見有諸奇異,尊者若欲必受其法,我等亦願隨從歸依」[『過去現在因果経』卷四(『大正』三卷,六四九頁中)]。これに類した記述は,「我等見仏降竜已,生信心,但待師。願皆隨從」[『五分律』卷十六(『大正』二二卷,一〇九頁中)],「我等先亦有心於沙門瞿曇,当降竜時,尋欲歸命。若師自歸瞿曇者,我等五百弟子,盡自歸於瞿曇所」[『増一阿含経』卷十五(『大正』二卷,六二一頁下)]など。
- (18) *J. (PTS), i, p.82.*
- (19) 水野弘元『釈尊の生涯』一五一頁。
- (20) 菅沼晃『ブッダとその弟子89の物語』四二頁。
- (21) 前田恵學『仏教要説』一八頁。
- (22) *Vin. (PTS), i, pp.32-33.*

(平成九年度駒澤大学北海道教養部学術研究助成による成果の一部)